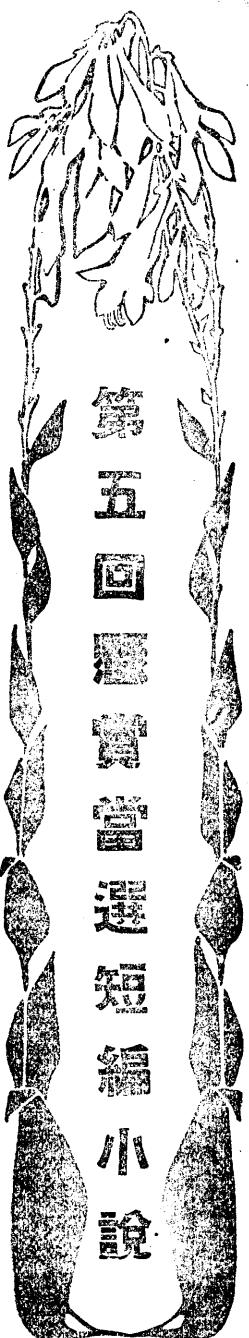


ひおのれまで、揃ひも揃ひし腰抜けめ、思ひ知れや。
と小刀抜取り打付ければ、ギヤツとばかりに仰反つて、
悪の報いは主から喜島、二言と云はず死してんげり、
與二は一巻突付けて、香西孫六の女房お谷が、女子に
似氣なき忠節にて、かゝる證據の手に入りしを、政元
公の御覽に入れ、我が此度の戰功に申し代へて御許し
受け、澄之君に疾くよりして、授けられたる手筈を違
へず、汝が討手に向ひし上は、叶はぬ處と潔く、罪に
服せや、三郎好員。サア高畠白状せぬか、豫て今夜
と思ひ込み、命目的に入込んだ、又六孫六藤六三人、
かく取巻いたる上からは、三六二重三重に、巧んだ悪
事の算用違ひ、運の極めと觀念せよ。それとも飛込み
首討たうや。如何にと責め立てられ。是非に及ば
ぬ、これまで。と持つたる太刀左手の脇へ、グツと突
立て撞と座し。かくなつても管領細川政元の執權高畠
三郎好員、無禮せば許さぬ。と根強き惡念ホツツと、
吐出す息は篝火の炎と燃えんばかりにて、引廻した
る刃先を、抜くより早く咽喉に刺貫いてぞ息絶えた

る。悪人ながら最期の立派さ。われは此旨我君に、委
細申せし其上にて、六郎君の御上洛、何彼とお家の治
まる様、心の限り計らうが、九郎君の御爲め一つには、
親兄が後世の爲め又家の爲め、妹が現世に迷はぬ爲め、
香西兄弟藤六も、君の爲めには命をも、捨つるが武士
の名の爲めぞ。と勇む處へ女房照葉、駆付けて。申し
我夫、今夜の企で計略智謀、天晴れぞうと我君の、御
稱美あつて、兄上の罪はお赦し、それのみか、澄之薄
綱兩人の、僧尼にやろとて此のお墨附、これで未來の
母様も、愈成佛なさろかと、思へば何より嬉しいやら、
忝け涙がこぼる。と差出す御書をハ、ハツと、戴く
定行それと見て、俱に喜ぶ人々の、胸の震るゝは賞罰
の、正しき爲めや晴れ行く空、明けて行く夜の鶴の音
は、東天功名首尾よしと、一同囁く手柄にも、争ひは
なき一番二番、萬歳千秋限りなき、神の御國の民草の、
榮ふる中の道直ぐに、亂れぬ家こそ目出たけれ。

(大尾)

第五回 暫當選短編小説



假寐姿

第一等

森田二十五絃

小石川傳通院の裏手、新道の荒物屋と花屋との路地を曲ると、突然が古い墓場で佛は悉皆無縁になつたらし
いのが、道普請に半ば取壊たれて、其隅に三軒續きの裏長屋。取附が造兵の職工で次ぎが麻裏屋、奥の端れに
三月程前に引越して來た夫婦者。男は飯田町の郵便局へ奉職するといふ、容子が一軒に書生染みて始めて所帶
を持つたといひさうな、それで女房さんと云ふが、一寸見ても眼の縁の極印で素姓の讀まれさうな姪嬢女、男が
歳下なので始終氣にして顔を化粧つて居るらしく、一寸見ては二十五六だが何しても三十上だねと、その來た

時から氣に喰はない女だと云つてゐる造兵の細君が云ひへしたものの、それでも人愛想がよくて、氣が軽くて、容態振らない所が左隣のなぞとは雲泥萬里だと、麻裏屋の姨母さん丈は強い負の仕やう。

今年の春は雨が多く、櫻花時分に書入の日曜を二つまでつぶして、龜井戸の藤も臺なしとやら、今日も朝から降出して、日暮には風も交つたのである。

紺蛇の目の傘をば少し肩を窄めるやうにして、湯歸りの濡手拭、石鹼と糠袋とを持添へて、きりといた裾捌き、新しい爪革の高足駄に素足の汚れるのを氣にして路地を這入つて來た例女が、通りすがりに麻裏屋の前で聲を掛けた。

『姨母さん有難う、大變に長湯して湯氣に上りさうだわ。』

『あ、お六さんかい、旦那はもうすつと前にお退けで、お待兼だよ。』

『さう、何うも憚りさま。』と蓮葉に云つて其上氣した頬に嫣然した。

II

『そんな寫眞なんざあ何でもありやしないんだけれども、それほど氣に掛かるなら燃しちまやあ可いんでせう、ね、貴郎の目の前で焚いちまひますよ。』と、お六は今まで俯向いて居た顔を上げたが、前歯で咬み緊めた下唇は白く色を失つて居る。

『ねえ、そんなに済まないやうな顔を仕てないで、そんなもの早く此方へ渡してお了ひよ。』
食臺を側へすらして、女は身體を斜めににぢり寄つて、寫眞を取つた男の手に手を掛けた。

『お止しなさいよッてば!』

『何をするッ。』と引奪つて『誰が燃せと云つたい。』

『まあ』とお六は機みを打つて倒れさうにして、憫れたもんだねと云つたやうな眼元でちらりと流盼に睨めた

が、急に氣を變へて、

『何うしたといふんですよ貴郎、もう一濟んだことは済んだにして忘れて下さいな、それあね尤、そんな寫眞を持つて居たり、貴郎に内密で墓参りをしてお經を上げて貰つたに違ひないんだから、何と言はれたつて口は利けないけれど、其人なんざあ元々何でもありや仕ないんだもの、始めツから打明けときや恁んな疑は受けないのに、隠立てしたのが重々悪うムンすから、もう何も角も言つて了ひますからね、得心が出来たら根や葉は残さないやうにね、後生ですよ。』

男が返辭をせぬので張合無さ相でもあつたが、

『些つとも秘み隠しはないのだから、そのやうにまあ肚を立てないで……。』

びつたり寄り添つて、男の膝に手を掛けて睨と視上げた顔は妙に凄艶の趣きを帶びた。一時降り止んだ雨はまた土砂降りとなつて、桶を溢れる雨水は雨戸に傳つて怖ろしい音。女は身顛ひして、男と顔を並べて後ろをかへみ回り視た。

『丁度斯う暴れた晚でした、宵から客足も絶えて地廻りがうろくするばかり、樓内でも馴染のお客が三四人あつた位で、早退げにして仕舞つたんですがね、私はもう雷さまと云ふと直ぐ頭痛がして堪へられない性分だから、張店に居るのも嫌でたまらず、御内所へ断つて、自分の部屋で夜着を引被つて寝て了つたの。然うするとね、さう夜半かれこれ二時過ぎよ、お熊どんが——貴郎も知つてゐるでせう、そら、頸に癌のある新造衆——

花魁々々つて搖り起すの、私や怖い夢でも見て居た所なんで、頭がぐらぐら眼が眩ふやうだから、大概のお客なら病氣だと云つて断るんだよと懶貪にいふとね、なにもうお熊どんの後ろに突立つて居るのがその源さんさ、普通のお客ですよ、横山町邊の何でも大きな葉菴屋の手代さんだといふんだが、錢離れもよくて相手の仕よい人だから、普通一通には遇らつて居たのさ。』

『紫君さん、厳しい御挨拶だね、頭でも擦りませうか。』つて、火鉢の前に座つた其人の顔が眞蒼、好い男なのよ。酌をして居ても何うも容子が變だから、私も薄氣味悪くなつて、眼も冴えて了つたけれど、こんな人は早く寐させるが可いと思つて、もうお退床にしませうかと言ふとね、暫く待つて呉れつて動きさうにもしないの。

私も睡いんだから夙んで下さいなど押返していふと、急に血相を變へて私の手を斯うむづと摑んだの。』

『無言て腕を拱いたまゝ、目も放たず女の横顔を眞めて居た男の瞳はこの時ざらりと光つた。』

『可いでせう。頂きますよ。』とお六は男の前の猪口を取つて、ぐつと飲み乾してその新月の眉を整めた。

『見るともう瞳子が据つて、唇の色が全で變つてゐる。平生ならそんな事で驚くんじやないけれど、あの時はかりは心から怖氣がさして、思はず「何なさるんです。」と云つて振離さうとすると、吸ひ附いたやうに堅く握り占めて、何うしたつて離さないの。』

『こんな野暮な事をしちやあ濟まないが、私わもう今夜限り、夜が明けるまで生きちや居られない身體だ。私のやうな者に見こまれたがお前さんの不運、因縁づくだと諦めて一緒に死んで呉れぬか。』と、其聲が地の底からでも聞えるやう。

『私やもう其時は夢中だつたから、大方聲も立てたのでせう、摑へられた二の腕に囁りついて、振挽ぎつて隣の妓の部屋へ逃げ込んだと思ふと、後ろにわつといふ聲が。』

『それから樓中の騒ぎ。』
『女はその時その場の様子を今眼の前に見るかのやうに、髪の後毛を口に咬へて眠と灯火を見守つたが、面も炎ははらくと搖いた。

『女のか心といふは妙なものね、前には怖くて逃出した程なのに、斯うなると後髪を引かれるやうで、何うしても死骸に一目會はなけりや濟まないやうな氣がして、そんなもの見るもので無いつて皆して留めて呉れるのと無理に振り切つて、書記の西川さんの肩越しに窃と覗くと、もう堅くなつてゐるの。』と涙ぐむ。

『喉笛から口へかけて血糊がべつたり、短刀の切尖が頸に白く……その立派さ、薄すら開いた眼も笑つてゐるやう、見ると胸一杯、悪かつた私が……。』と死骸に縋つて泣いたわ。

『何も惚れたの好いたのつて心は微塵も無いけれど……それはもう此胸が割つて見せられるものなら見せたい位だけれど、假にも私の事を思つて呉れて、私のために命を捨てるやうになつたのだもの、惜いたあ思へない、あゝ罪な事をした、お氣の毒なつて心は何うしたつて離れないわ、それだけは貴郎だつて堪忍して呉れるでせう。』

『男は組んで居た手を解いて、ほつといふ溜息を吐いた。

『月の十三日は其人の命日なの、廓に居た時分は新造衆に頼んで、毎月谷中の墓まで詣つて貰つて居たのです
が、貴郎と斯うなつてからも、それあね全く……私でも香花を手向けて遣らなきやあ無縁佛になるんだといふし……一言かうくだつて打明けときや可かつたに、私が悪うムンした。え、もう分つたでせう、分つたら堪忍して頂戴な、それも貴郎が往つて悪いと云やあ、これからはもう往きやあ仕ないわ。』

『甘えたやうな調子で云つて、男の袖に鬚の摺れるほど附着いて、恍惚と横座になつたが、湯上りのまだ濡れ

て艶々した洗髪が、頸筋の目立つて白いのにぱらりと落ちた形容、鮮やかにも又媚めかしい。その媚を有つた女の嬌態を現かのやうに視守つた男は、一時激した氣の段々静まと共に、名狀す可からざる一種の感想に打れた。

女の打明けた懺悔に就いて非難す可き點はない、非難なべき所が無いだけ云ふに云はれぬ物足らぬ所がある。女に對して抱いた疑團は正に解けた、いや解く可き筈である。それが尚喉元に鐵丸の瘡へたやうな不愉快さは、女が死者に向つて盡す心意氣に平かならぬのであらう。生前命に懸けて憎み合つた敵ですら、冷めたい石の下に隠れたと聞いては、誰しもしがない一杯の土と争つたのを悔ゆるといふに、淺ましいではないか。彼はこの念を口に出すには餘りに専大であつた、否、明かなる概念として己が胸の中に浮むるをさへ自ら拒んだ。

この念これを何にか喻ふべき、秘藏の玉壺を取出して見て、何時の間にか輕からぬ瑕の入つて居るのに憫れて見守りながら、倦て眼を瞑つて庭石に抛り附ける勇氣もない。

『なぜ、何時までもそんな六かしい顔をしてるんですよう、何とか云つて下さいな。』と、お六は起き直つて男の膝に両手を揃へて掛けながら、何處を探つてやらうかといふ見得で見上げた時、

『相澤さん、相澤信一さん、郵便！』

『はい。』と高く云つてお六が立上ると、戸の隙間から白い物を差入れて、雨の中をびしょーと立ち去る足音。

三

久しく御消息も打絶え申候へども、お兄上様ことその後何のお變りもなく、御息災にて御勉強遊ばされ居

り候こと、存上まゐらせ候。この春よりは吉炊とやらを遊ばし、男のお手にて馴れぬ水喫業まで成さるとの由、母さま初め光も何んにかく御案じ申上まゐらせ候。兄様が御無事で御成業遊ばすやうに願をかけ、毎朝鎮守様へお詣りすることは、國をお立ち被成てより丸五年一日も欠したことは御座なく候へども、母さまは御持病の痛風が重り、この頃では毎朝光ばかり母様の分も兼て詣り居り候。かやうに申上げたら又兄様の御心配の種になるか知らぬが、お留守の間永の歲月、女ばかりの暮しは實に寂びしい。母さまはお歳のせるか段々お弱りなさるやうだし、近頃は明暮兄様に會ひたいと、そればかり口癖のやうに仰やり續けて、それを側で聞いて居る光は誠にお氣の毒でじつに辛いの。御修業も大切にて、兄様が御出世をして立派な方に成つて下さるのは、嬉しいことは嬉しいが、光はもう、寧そ兄様が國へ歸つて下さつて、親子三人一緒に暮したら、何んに兄様が英いものに成つて下さらなくとも可い、母さまも光もこの上の榮耀榮華は少しも希望とは思ひ申さず候。若しお氣に觸つたら勘忍して、唯々母様のお氣の休まるやう、是非々々一度お歸り被下たく、これのみ光が一生のお願ひに御座候。かしこ

光 より

兄 上 様

稚氣な妹の筆の跡を、そのまゝ石とも化るべく凝視めた信一の手は、風に揉まる、蘆の枯葉とばかり戦へて、身體中の血が一時に氷るやうに覺えた。

若し世に最聖い男の涙を要求するものがあつたら、それは罪人の獄舎に臨んだ女天使と、地にしては妹からの手紙なのだ。されど彼は泣くのをすら禁せられたやうに感じた。——兄様が何んに英いものに成つて頂かなくてもよい——是れ、何も知らぬ妹の書いた文言だ。

亡父が膏血を搾つた遺物の五反歩も、盡く兄の學資と清えた後、母と妹とが藻搔くやうに思つて待つて居る。信一は、一昨年の判檢事辯護士の登用試験とも見事に外した時、何ういふはめか惡所通ひを始めて、止むなく郵便局の腰辨當、それも當座は臥薪嘗膽の苦を忍んで、是非一度は月桂冠をとまじかつたが、退かれぬ義理から今の名は紫君と共に棲するに至つて、彼の身は眼に見えぬ蜘蛛の網に十重

の苦を忍んで、是非一度は月桂冠をとまじかつたが、退かれぬ義理から今の名は紫君と共に棲するに至つて、彼の身は眼に見えぬ蜘蛛の網に十重



*二十重と絡まれて丁つた。『何なすツたの、貴郎、氣に懸るお音信なんですか。』と、お六は乗つかるやうに膝突き合せて、かう問ねた。『妖婦！乙の歳老けたる妖婦が巧く眼を瞼つ



*いて發すると、忽ち膝に覺ゆる一團の微温が、蛇の爛れた肉かと櫻として、男は彈かれたやうに身を扯いた。『まあ酷いのね貴郎は。』と、態と眼を瞼つ

言令色に魅入られて、母と妹とが救を求めて泣き叫ぶのも耳に留めず、己は萬人の垢膩に染みたる一娼婦が残骸を抱いて、大都の人波の中に捲き去られつゝあるかとの一念、心頭を衝いたが、『何爲るんだよ此兒は、阿母さんが目を眩はしまさあね。』いつも機嫌の悪い時に外らかす傳で、眼に前日幾多の遊冶郎を懲殺したその眼に媚を含ませて、信一の手を取つて口へ持ていかうとしたが、見るゝ峻はしくなつた男の眼附に、思はず手を離して、力なく頸垂れた。

雨も止んだらしい、樋を傳ふ雨垂の音が折々思ひ出したやうに只！
傾向いた鬚がびりりと顫ふかと思ふと、疊に音するばかり大粒の涙となつた。
『私や矢張瞞されて居たんだねえ、口惜しいッ。』と亲切歎をきりりと鳴らしたが、突如男の手から件の手紙を引奪つて寸断々々に裂いて了つた。

『馬鹿、何を……。』

『關ふもんか、何爲たつて。』と涙に泳ぐ眼で睨と見返して、『故國の妹だなんて疾うから怪しいと思つてたんだ。何だい、他人の男を奪らうとしやあがつて。さあ私を捨て、歸れるなら歸つて見るが可い、さあ捨て、見ないかい、捨てないかい……。』

蒼い頬の肉がびくくと動くと、がばと疊に顔を押附けた。

餘りに鋭い女の廻り氣に、信一は憫れもし情なくも思ひもし、旅すべし術も知らず、茫然凝視るのみであつたが、急に立ち上つて帽子を被る、づかくと上樞の方へ。

泣吃迺と共に肩で息して居たお六は、この時、堪へず駆け出した。男の前に立塞がる。

『もしッ、何處へ往らつしやるの、わ、私が遣りやしないから……。悉皆私を悪いんですよ、何も角も……。』『離せと。』只一言、振りちざると、踏跟と闘越しに女は倒れたが、そのまゝ聲も立てなかつた。

四

雨を含んだ綿雲は千切れくに、築土の森に落ちかゝつた十四日の月の前を飛ぶがやう。夜も既や一時、江

戸川端のビーヤホールを出た信一は、酔を買はんとして酔ふ能はざる苦しさに、頭がふらりとして足が悚むやうなのを、踏み堪へて安藤坂を登つて行く。
足元からわくくと白い霧が立登つて、目の前を一面に包んで了つたかと思ふと、遠くの方に微かな灯火の光が射す、それが段々明るくなると煤びた障子の影に、若い女が横になつた老女の腰を擦つて居るのが、不圖顔を上げると、十四の時に分れた妹の、そのまゝ大人びた穧顔。
『あれ阿母さん、兄さんが……。』と叫んだので、吃驚して二足三足逃げ出す途端に、今までの薄原が岸破と落ちて真倒さま、既に命は無いものと覺悟した時、
『信一さん、私も一緒に死ぬよ。』と悲鳴を上げて、續いて飛び下りた女、『お六か。』と云つて袖を摑まうとする
と、からくと高笑の聲が聞える。見上げると、今ビーヤホールで讀んだ新聞に肖像が載せてあつた、教科書事件の掛りで、同窓の友で、衣冠正しい若手の判官だ。

『さうだ、こんなに決心が動搖つくやうでは可かんぞ。彼んな女に眞の愛情があらう筈がない、若しあれば火花のやうな戀なのだ。あゝ俺は女のむら氣に操られて、既に一生を誤るところだつた。

『阿母さん、光ちゃんも堪えてお呉れ、今から精神を改めてこれ迄のお詫はは屹度するからね、だから寂びしくばあらうが、もう暫く辛抱して留守をして呉れ、阿母さんのことを能く頼んだぞ。この秋には必及第して、近隣へ面目の立つやうになつて歸るからね、もう命懸けだ。お六などとは斷然、此方から身を退けばそれ切りだ。明日とは云はない、今夜中に片を附けて了はなければやあ。』と、信一が正氣に復つて、再びこの決心を胸の中に入繰り返した時、彼は傳通院の墓場の中を歩いて居た。

月色更に黒く、雲低う垂れて一重。只ひやりと。

石塔の影から怪しき人影が現はれて、するゝと夜の翼のやうに信一と擦れ違つたが、通り過して、

『もし。』

と細い女の聲。

耳にもかけず信一は往きかけると、

『もし、一寸。』呼びかけて袖を捕へた。ぎよつとして立留る。

『何です、お前さんは。』と、じろくそ姿を躊躇めたので、女はときうとしたやうであつたが、『知りませんよ旦那、ほゝゝゝ御弔戯もんですねえ。』と強かに云つてのけて、捕へた袂を離さうとはせぬ。その聲は囁れて居た。

垢に汚れて觸はれば冷やかな給を着流した肩のあたり、痛々しいまで瘠せ細つて、髪の毛の薄いのに氣味の悪いほど白く塗つた額が薄明りにはの白う。死の影に取巻かれた四圍の寂寥が身に迫るやうで、信一は我にもあらず身顛ひした。

弱きものよ、汝の名は女なり。されば一片の麵苞を獲るべく、死に瀕しても、その纖弱い腕に男の頸を巻くのを辭さぬのである。

信一は自失したやうに女を凝視つたが、眼にありくと映つたのは、明日のお六が姿であつた。

突如、女を突き離して駆出した。

* * * * *

洋燈の火屋が曇つて赤くどんよりした光を投げて居る下に、お六は先さに泣伏したしどけないまゝで、丁度難船した死體が荒磯へ打上げられたやうな工合に倒れて居る。

寐入つて居るのか、信一が這入つて來た物音にも身動きもせぬ。枕元に突立つたまゝ寐顔を見下ろしたが、

不圖それが一面識もない旅人であるかのやうに、男の心に思はれた。

肘の上まで袖のたくし上つた腕に枕して、顔の半面を見せたのが、涙に洗はれた頬の氣地の荒れやう、眼の縁の黒い輪に幾年の飲酒と睡眠不足との跡を留めて、少しく下に歪めた唇は汲み乾された古井戸の如く、過去の己れに辛かりし世を呪へるかのやう。容貌を以て男に愛せられんとする猛烈なる女の願は、今は消え失せて、たまひの暫し離れた形體には、意地も張も見得もなく、倦るさうに投げ出した姿は十年一夜に老けた。

信一は息を詰めて薄暗い部屋の隅々を巡回すと、壁に沿つた鏡臺の鏡立から、水のやうな光を反射した。彼は自分の手で自分が呑んだ毒薬の、一時に渾身の血を濁らすやうに覺えて、がつくりと膝を落したが、聲を上げて泣きたいやうな心持がした。

